氏　　名	：	尹　テレサ
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 269 号
学位授与年月日	：	平成２８年３月１５日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	第二言語から第一言語への言語転移現象に関する実証的研究－韓国人日本語学習者の「てもらう〔a/eo　batda〕」表現に注目して－
論文審査委員	：	（主査）　教授　金澤　裕之 （副査）　教授　松井　智子　　教授　佐野　富士子 教授　齋藤　ひろみ　　教授　寺井　正憲

学 位 論 文 要 旨

本研究では、第二言語から第一言語へという、一般の言語転移とは逆方向に起きる転移現象の実態を明らかにすることを目的とする。第一言語が確立されていると思われる成人の韓国人日本語学習者を対象に、日本語の「てもらう」を逐語的に訳した形態である韓国語の「아/어 받다〔a/eo batda〕」表現に焦点を当て、第二言語である日本語が第一言語である韓国語に影響を与えるという「逆転移」について検証する。

日本語において、授受動詞「もらう」は「てもらう」の形式で補助動詞として使用されるが、韓国語においては、日本語の本動詞「もらう」に対応する動詞「받다〔batda〕」は使用されるものの、日本語の補助動詞「てもらう」に対応する「아/어 받다〔a/eo batda〕」は使用されない。このような両言語の対応関係の不一致により、日本人韓国語学習者において「てもらう」を用いる箇所に「아/어 받다〔a/eo batda〕」という誤用文を産出してしまう例が多々存在する。このような例が韓国人日本語学習者からも用いられるところから、言語転移が必ずしも第一言語から第二言語への方向のみならず、その逆方向においても出てくる可能性があるのではないかと考えるようになった。

しかしながら、言語転移や逆転移の現象を判定することは難しく、様々な工夫が必要であるとされている。そこで、筆者はアンケート調査（第 3 章）、実例調査（第 4 章）、翻訳文調査（第 4 章）、許容度調査（第 5 章）、作文調査（第 6 章）、という多様な方法から逆転移の現象を調査し、考察する。

第 1 章の「序論」では、本研究の背景と目的、及び本研究の構成について述べた。

第 2 章の「先行研究の概観」では、「授受表現に関する日韓対照研究」と「言語転移に関する研究」について概観を行い、そこから本研究の立場と先行研究の問題点について述べた。

第3章では、韓国人日本語学習者を対象に、逆転移に関する意識調査を行い、逆転移現象についてどのように認識しているのかについて調べた。アンケート調査の形式は選択式・記述式に分かれており、調査対象者の属性を日本滞在歴の有無を基準に2つのグループ（JSL/JFL）に分け

て分析を行った。その結果、逆転移に対し、全体的には肯定的に認識しており、部分的な項目では、否定的に認識している傾向が見られた。また、自由記述式調査を通して、音声・単語・文章・表現など多様なレベルにおいて逆転移を経験していることが窺えた。

第 4 章では、韓国人日本語学習者を対象に、「아/어 받다〔a/eo batda〕」表現の産出を確認した。「아/어 받다〔a/eo batda〕」の産出有無を確かめるために、韓国人日本語学習者による「아/어 받다〔a/eo batda〕」の実例を集めるという実例調査と、「てもらう」文を含む日本語の文章を韓国語に翻訳してもらうという翻訳文調査を行った。その結果、韓国語母語話者の話し言葉及び書き言葉、翻訳文の中に「아/어 받다〔a/eo batda〕」表現が産出され、第二言語である日本語から第一言語である韓国語への影響があるらしいことが分かった。さらに、「아/어 받다〔a/eo batda〕」という誤用表現が生まれる背景として、「日本語と韓国語の接触」を挙げた。

第 5 章では、日本語の学習歴と滞在歴があるグループと日本語の学習歴と滞在歴がないグループに分け、「아/어 받다〔a/eo batda〕」表現に対する許容度調査を行い、日本語接触有無と「아/어 받다〔a/eo batda〕」表現に対する許容度の関係を調べ、その理由について考察を行った。日本語の学習歴と日本での滞在歴があるグループ(KJ)と、日本語の学習歴も日本での滞在歴もないグループ(KK)を対象に、日本語の「てもらう」に相当する韓国語の「아/어 받다〔a/eo batda〕」に対する許容度を調べた。その結果、韓国語として不自然な表現である「아/어 받다〔a/eo batda〕」に対し、KJ の許容度が KK より有意に高く、日本語の学習歴及び日本での滞在歴が彼らの第一言語である韓国語に何らかの影響を与えていることが示された。そして、こうした逆転移とも言える現象が起こった理由として「パラダイムの合理化」を主張した。なお、個々の動詞の許容度の違いからは、「아/어 받다〔a/eo batda〕」の許容度には、第一言語に元から存在する複合動詞としての解釈可能性が関わっている可能性も指摘した。

第 6 章では、第 5 章の許容度調査において、許容度が最も高かった韓国人日本語学習者に注目し、自然作文データの分析を行い、作文に見られる逆転移について確認した。次に、日本語への接触がない韓国語母語話者と韓国人日本語学習者を対象に、面識のない大学の先生にレポートに必要な図書を借りるという課題作文調査を行い、比較を通して、両者の母語使用に差があるということを明らかにした。

第 7 章の「結論と今後の課題」では、各章で用いた様々な調査を通して明らかになった点をまとめた上で、逆転移研究への提案を行い、今後の課題について述べた。

本研究は、まだ報告の少ない分野である逆転移について複数の調査方法を用いて検証を行い、成人のバイリンガルの第一言語の感覚や使用において、モノリンガルと異なる特徴が見られることを明らかにしたことに意義があると思うが、逆転移の現象の一般化には至っておらず、今後さらなる検証が必要であると思われる。